



93.10.9 蘆溝橋 画 奥田 宣子

93.10.9 蘆溝橋(瀬瀬川)

「横浜事件」と和田喜太郎

特集・二〇〇〇年を迎えて

個人的な体験から

二〇〇〇年を迎えて

外国からのお客様

会員の皆さまへ

編集後記

下戸 明夫

伊藤 堅二

瀬野 尚憲

布川 康子

「横浜事件」と和田喜太郎

下戸 明夫

竹馬の友の父君だったK翁が、いつか「荒山の和田」という医者の息子が戦争末期に、アカだった。一度君が調べてみるとええぞ……」と声を潜めるようにして教えてくれて、まもなく亡くなられた(K翁は昔朝日新聞の記者か通信員だったようで地域のいろいろなことに詳しかった)。この一言から、アカと呼ばれた和田医者の息子のことに関心を持ち始め、荒山地域へ入っていろいろ聞いてまわったが、和田というお医者さんが昭和のはじめ頃まであつたこと、その奥さんが戦争後までおられたこと等は覚えているがその息子のことは知らないとのことであった。家族はもちろん不在、ただ屋敷跡は残っていた。(地域の人には知っていても言わないのか)はつきりしたことは不明のまま過ぎていた。

それから「横浜事件」と和田喜太郎に関する若干の資料集めと学習をはじめたが、知れば知るほど怒りがこみあげ、地域の人たちにもこのことの正しい認識と理解を得ていただくことの必要を痛感するにいたり、何らかの記録の断片でもと思った次第です。

そのうち岩波書店のブックレット「横浜事件」を読んでいるうちに、和田喜太郎の名があるのに気づき、ひょっとしてと思ったのが始まりで、和田医院の息子が喜太郎といい、「横浜事件」で中央公論社の社員として検挙され、獄死した人であることがわかった。また妹のすみ子さんが現在埼玉県新座市在住であること、そして高文妍から「横浜事件—妻と妹の手記」が発刊されていることもわかつた。

ところで、戦前・戦中を通じて最大規模の言論・思想弾圧事件と呼ばれる「横浜事件」とはどんな事件だったのか、社会科学辞典や報道されている資料からみると：一九四二（昭和一七）年、総合雑誌『改造』の八・九月号に連載された細川嘉六の論文、「世界史の動向と日本」が、すでに内閣情報局の厳重な検閲を通過したものであるのに、陸軍報道部より「反戦主義の鼓吹、巧妙な共産主義の宣伝」として指弾をうけ、警視庁は、ト「横浜事件」を読んでいるうちに、和田喜太郎の名があるのに気づき、ひょっとしてと思ったのが始まりで、和田医院の息子が喜太郎といい、「横浜事件」で中央公論社の社員として検挙され、獄死した人であることがわかった。また妹のすみ子さんが現在埼玉県新座市在住であること、そして高文妍から「横浜事件—妻と妹の手記」が発刊されていることもわかつた。

そこからアメリカ労働運動と関わっていたことからアメリカ共産党との関係を疑い検挙していた。細川・川田に関する研究者や友人の検挙の波はひろがり、このなかで細川を囲む一枚の写真がみつかった。細川が七月新著の『植民史』出版記念に富山県泊温泉に親しい研究者や編集者を招待したときの記念写真だつた。特高はこれを日本共産党再建準備会議であるとして、細川と川田を結びつけ八〇名にのぼるジャーナリストや研究所員を検挙したのである。

検挙が八〇余名に及んだことから、特高は被検挙者をその所属によつていくつかのグループに区分し、人的連携をもつ一連の事件として「コミニンテルン及び日本共産党の目的遂行のために活動した」という空中楼閣をつくりあげた。そして特高がつくった筋書きにそつて自白させるために凄惨な拷問を加え、獄死者四名、保釈直後の死者一名、失神者一二名、負傷者三二名を出し、また、改造社、中央公論社は解散させられた（一九四四年七月）。裁判は、四五年の敗戦直前から敗戦後の九月一五日にかけ、三〇名ほどが有罪判決を受けた。

戦争が終つて、四七年四月、事件被害者のうち三三名は、拷問特高二八名を告発し結果は三名の有罪が確定した（五二年四月）。

その後、八六年七月、事件後四年、七〇～八〇歳の高齢に達した関係者や遺族は、横浜事件有罪判決に対する再審請求を提出したり、何らかの記録の断片を認定した最高裁判決は、原判決が証拠とした「自白」が拷問・強制によるものであることを認めた。

原 燐

制によることを示すものであり、最新を開始すべき新たな証拠になるという点におかれた（この再審請求人のなかに、和田喜太郎の母、没後は実妹のすみ子氏が含まれている）。「横浜事件再審裁判を支援する会」も結成された。

裁判は、市民常識からすれば、直ちに再審、原判決取り消しと思えるのに、判決原本をはじめ一件記録がごく一部しか残されていないとして（敗戦時に当局によって焼却）今なお係争中である。

この横浜事件の獄死したなかに和田喜太郎の名があります。

和田喜太郎は、京都府中郡新山村（現峰山町）荒山で、医業四代目の父・和田精一と、母・かよとの間に次男として、大正五（一九一六）年一二月四日に生まれています。

地元の新山尋常高等学校から、兵庫県立豊岡中学校を経て、慶應義塾大学文学部予科へ入学、昭和一六年一二月同大学文学部仏文科卒業。同一年一月中央公論社に入社。雑誌『中央公論』の編集部に籍をおき、出版部に移つた後、同一八年九月九日、神奈川県

特高警察に検挙され、同一九年八月二一日、懲役二年の判決をうけて下獄、同二〇年二月七日獄死ということになります。

父の精一は、昭和七年四月胃潰瘍から急性腹膜炎で五五歳で死去。長兄はすでに医者とは別の道へ進んでおり、喜太郎も家業を継ぐ意思なく、妹のすみ子さんがせめても、京都府立宮津高等女学校から東京の帝国女子医学薬学専門学校（現東邦大）へ進学、家業の医院は廃業。わずかに残された遺産をたよりに荒山の母の手で子どもたちは成長したようです。

喜太郎は、性格的に長兄とは対称的に物静かで、母に逆らったこともなく、かりに自分は反対意見であつても「だけど僕は、こういうふうに思う」といった調子で、けつして正面から争おうとはしませんでした、と妹のすみ子さんは述べている。喜太郎と妹のすみ子さんは五歳ちがいである。喜太郎が検挙され投獄、そして限られた面会差し入れ、最後の遺体の引き取りまで兄妹として愛情に満ちた間柄は続いたようだ。当時、薬学生だった妹すみ子さんが、遺体を引き取りに行かれたときの場面

は、手記を読んで胸を打たれる。

横浜の笹下の刑務所から「キタロウシス」の電報を受け取

り、気も狂わんばかりの不安で駆け付け、受付へ行き、来意を告げると、看守なのでしょうか、目つきのよくない男が出てきて、私の名を確かめ、それから、薄暗く、何も置いてないガランとしたタタキの部屋に、私を案内してくれました。

ふと見ると、部屋の中央に、ムシロをかけただけの遺体が、投げ出すように置いてあつたのです。なんとむごい扱いをするのだろうと、いたたまれない思いでいる私に、案内人は、「和田喜太郎に間違いないな」とムシロを取りのけてみせました。

アツ、と私は声をのみました。そこには、一糸まとわず、パンツさえもはぎ取られた全裸の男の屍体が、タタキの上に横たわっていたのです。遺体は、全身がどすぐろく異様にふくらみ、眼はみひらいたまま中空をにらみ、あまりにも変わり果てた姿に、これが真実、私の血をわけた兄であろうかと、われと

わが目を疑い、いいようのない屈辱、怒りと無念の思いで、私の胸は張り裂けんばかりでした。

虚構の罪を負わされ、拷問に責めさいなまれ、死してなおイヌ、ネコにも劣る扱いを受けた兄、怨み骨髄に達しながら死ん

でいつたにちがいない兄の心中を思い、なんと不幸な星の下に生まれてきたのでしようと、この兄があまりにも哀れで、私は遺体にとりすがり、みひらかれた眼をソッと閉ざしながら、あふれ出る涙をどうすることもできませんでした。

正月休みや、夏休みになると、兄妹は前後して荒山に帰省して休日を過ごしたが、喜太郎はほとんど机にむかっての読書三昧、時また小学校時代の親友のところへでかける程度の、本の虫だった。本科に入つてから、ある夏休みのこと、大きな声でフランス語の発音練習していたと思ったら、ロシア語だったともいう。日米開戦の年の夏休み、「東条なんかに内閣をとらせたらだめだ、そんなことは絶対だめだ」と、いつもの温和な兄に似ず、厳しい口調で、断定的に

検挙と同時に、ひとり母が住んでいた郷里の荒山の家にも特高警察がきて、喜太郎の書籍を見せると土蔵の中に入りこみ、たくさんの書籍類を持ち帰った。

昭和一八年九月九日検挙されるが、妹も母も、なぜ検挙されたのか、どのような事件に関係していたのか、ほとんどわからないまま過ぎ、戦後になつてようやくわかつたという。

妹のすみ子さんも、帝国女子医薬専門卒業し、母校の研究室に助手として勤務、動員の生徒指導をかねていなかの荒山へ、母に会い食糧補給に立ち回ることが月二回できたが、このことについても非

「彼はだいたい無口で、あまり発言しなかつたが、しゃべると実際に辛辣なことをいう男だった」と喜太郎を知る同僚は語っている。

慶応を出て、翌年一七年一月中央公論社へ入社している。

「彼はだいたい無口で、あまり発言しなかつたが、しゃべると実際に辛辣なことをいう男だった」と喜太郎を知る同僚は語っている。

言つたと、すみ子さんは覚えてい

る。この年、一二月繰り上げ卒業で

慶応を出で、翌年一七年一月中央

公論社へ入社している。



中央公論社入社の頃の和田喜太郎

そして、翌昭和一九年の初め笠下の横浜刑務所にいる喜太郎に召集令状がきた。荒山の家では、隣近所の人々が大勢、出征祝の準備に集まつた。しかし検事は

「あんな國賊を出すわけにはいかん」と派出所を拒絶した。荒山では喜太郎が帰つてくると思っていたのに、帰つてこず、結局、治安維持法違反で検挙され、取調べを受けて

いることがしれわたり、非国民・国賊の家となつてしまつた。それまで親しくしていた人々の態度は一変し、道で会つても顔をそらし、二、三人集まつてヒソヒソ話して

いるところに行き合えば、急に押し黙つてソッポをむく村八分の状態が続いた。夜、家の雨戸に石を投げつける人も現われた。

特集 一〇〇〇年を迎えて

個人的な体験から

伊藤 堅一

「二〇世紀とはなんであつたのか」という問題についてはさまざまな角度からの議論がある。私はできるだけコメント抜きに、個人的な体験、「私の二〇世紀」を思い起こしてみよう。

私が生まれたのは一九二五年、治安維持法が制定された年である

難の声があつた。当時、荒山と隣の河辺の二つの村の西側に、海軍の飛行場がつくられ特攻隊の訓練基地となつたが、「しょっちゅう帰つてきなるが、あれは特攻基地をスペイするためだそう」と村人たちはかけ口をかわした。

こうして喜太郎の残された遺族は「非国民」「スペイ」として冷たい村人達の眼を背中に意識しながら、戦後までを過したことになる。

（しもとあきお・峰山町在住）

そしていまもつて、その名譽回復の裁判は続けられている。

治安維持法や軍機保護法、国防保安法などで、国民が辛酸を嘗めた悲しい時代だった。

誰も何も言わなかつたことのおよその全容がわかつた。

和田喜太郎を殺した時代を、私たちは二度と招いてはならぬ。

「ゴク…」と歌っていた。そんなある日、突然音楽の先生がいなくなつた。誰からともなくあの先生は「アカ」だつたのだという噂が伝わってきた。近くの織屋さんに、小学校を出たか出ないかぐらいの女の子が秋田から働きに来た。すぐには一人前の仕事はできないから子守りをさせられていた。昨日まで大変なお金持ちだと思われた隣の家が夜逃げして突然いなくなつた。昭和四年の恐慌の余波が、こんな形で続いていたのである。

昭和一三年四月に中学に入学したとき、制服が国防色（カーキ色）に変わった。国家総動員法が公布された。翌年ヨーロッパでは第二次世界大戦が始まった。軍事教練が時間割のなかでほとんど毎日あつたが、英語の時間も週六、七時間あり、なにかにつけて「非常時」という言葉が叫ばれたが、わたしの意識のなかにはその実感は薄かつた。多くの友だちが陸海軍の学校を受験したが私がその流れにならなかつたのは、身体が丈夫でなかつたのと家に軍國主義的な空気がまったくなかつたためだろうと、今にして思う。

卒業の年に高等学校の入試に失

敗した。浪人したら「徵用」されるかもしれないと言われていたが、あえて上京して予備校に入つた。下宿がなくて、知人の紹介で東大前にあつた「至軒寮」というところに入れてもらつた。入つてみて驚いた。ここは、知る人ぞ知る右翼の寮だつた。徳積吾一、七郎が主宰していた。七郎は当時翼賛社年団の幹部で総合雑誌の巻頭論文を書いたりしていた。私はここで始めて高畠泰之訳の『資本論』を見た。この寮の幹部は東条内閣を幕府と呼び、「産業奉還論」つまり、資本家は利益の追求をやめ、工場などすべてを「上御一人」に奉還せよ、というのである。私は大学などに行くよりもこにいたほうが「経済の才」がつくと言われた。朝六時にたたき起され、徳積吾一先生の『西郷南洲遺訓』の講義を聴き、朝食もそこに予備校へ通わせてもらつたが、これでは十分な勉強ができなかつた。多くの方たちが陸海軍が投げ出され就職に困つた。大学は面倒を見てくれないので、朝日新聞の広告を見て応募した旺文社にした。この経験の意味がわかつたのは戦後になつてからである。徳積七郎は戦後、社会党左派の衆議院議員となつた。

昭和一九年三月の入試では、文部省が主宰していた。七郎は當時翼賛社年団の幹部で総合雑誌の巻頭論文を書いたりしていた。私はここで始めて高畠泰之訳の『資本論』を見た。この寮の幹部は東条内閣を幕府と呼び、「産業奉還論」つまり、資本家は利益の追求をやめ、工場などすべてを「上御一人」に奉還せよ、というのである。私は大学などに行くよりもこにいたほうが「経済の才」がつくと言われた。朝六時にたたき起され、徳積吾一先生の『西郷南洲遺訓』の講義を聴き、朝食もそこそこ予備校へ通わせてもらつたが、これでは十分な勉強ができなかつた。多くの方たちが陸海軍が投げ出され就職に困つた。大学は面倒を見てくれないので、朝日新聞の広告を見て応募した旺文社にした。この経験の意味がわかつたのは戦後になつてからである。徳積七郎は戦後、社会党左派の衆議院議員となつた。

戦後、すべてをやり直すべく、小学校の代用教員をしながら高校の入試を受けた。昭和二二年、四年遅れで旧制高校最後の学生となつた。こうして戦後の激動期を学生として過ごした。下山、三鷹、松川事件、朝鮮戦争、メーデー事件などの渦中を生き延びた。二八年には旧制と新制とが同時に卒業し、不況のなかに二倍の卒業生が対立物の闘争の過程である。闘争なきところに進歩なく、闘志なきところの闘争である。闘志なきところに進歩なく、闘志なき男に大成は約束されないと、マルキシズムまがいの言葉で受験生を叱咤し、次いで長い自伝的序文では「中学でマルクスの資本論全卷を読んでしまい、ダンテの神曲にまで目を通したのは日本中で僕らぬものはいない有名出版社である。しかし、その賃金、労働条件の悪さには驚いた。給料袋の裏に

科に進めば在学中に召集されると書いてある。もちろん、労働組合はない。組合をつくろうといううに向して失敗、しかたなく工業高専附属の教員養成所数学科に入つた。ここはまだ徴兵猶予があつた。東大前にあつた「至軒寮」というところに入れてもらつた。入つてみて驚いた。ここは、知る人ぞ知る右翼の寮だつた。徳積吾一、七郎が主宰していた。七郎は当時翼賛社年団の幹部で総合雑誌の巻頭論文を書いたりしていた。私はここで始めて高畠泰之訳の『資本論』を見た。この寮の幹部は東条内閣を幕府と呼び、「産業奉還論」つまり、資本家は利益の追求をやめ、工場などすべてを「上御一人」に奉還せよ、というのである。私は大学などに行くよりもこにいたほうが「経済の才」がつくと言われた。朝六時にたたき起され、徳積吾一先生の『西郷南洲遺訓』の講義を聴き、朝食もそこそこ予備校へ通わせてもらつたが、これでは十分な勉強ができなかつた。多くの方たちが陸海軍が投げ出され就職に困つた。大学は面倒を見てくれないので、朝日新聞の広告を見て応募した旺文社にした。この経験の意味がわかつたのは戦後になつてからである。徳積七郎は戦後、社会党左派の衆議院議員となつた。

旺文社といえば、受験生なら知らぬものはいない有名出版社である。しかし、その賃金、労働条件の悪さには驚いた。給料袋の裏に

れた戦後になって、赤尾はこれら
の文章をあわてて削除してしまつ
た。何とも皮肉な振る舞いである。

ようになるにはこうした苦い経験が関わっていたのである。
(いとうけんじ)

私が二〇世紀の表裏を見通せる

一一〇〇年を迎えて

瀬野
尚憲

今世紀は、科学の急速な発展と大量殺戮を伴なう社会不安が絡みあい、共産主義を標榜した国家の成立とソ連の崩壊、勝利を宣言した資本主義の矛盾が至るところで

を覚えていましたものの、五・一五以来、治安維持法により、私の周辺から多数の犠牲者が出土たにもかかわらず、私は保身に終始しました。

敗戦後、たとえ占領軍の疑惑にせよ、戦争責任者を徹底的に追究できなかつたことは、私たち世代の責任でした。ドイツと異なり、昭和天皇を始めとする戦争責任者

噴出し、弱肉強食の混沌とした時代であつたと総括できるのではないか。そしてまた今日ほど豊かさと貧しさが隔絶して存在し、汚染にまみれた時代はありますでした。あまつさえ原子核の分裂による兵器や電力という途方もない悪魔をつくりだしました。私は一九〇九年生まれの老頭男

私は一九〇九年生まれの老人間ですが、常に念頭にあつたのは、日本独特の「天皇制」でした。中學の頃から、なんとはなしに反発

朝日新聞で、ゴードン氏は「天皇在位一〇周年式典で、人びとのクールさに驚いた」と言い、「皇室

外国からのお客様

布川庸子

二つの班に分かれて中国からの
青年たちの来館があつたのは一九

大学に中国から来ている留学生。風貌は日本人と変わらないからガイドとしては、来館者なのが通訳

最初ロビーで盛んにおしゃべりしていたのが通訳をする人たちで、胸に白いプレートをつけて後から入館してきたのがお客様だと

のハリウッド化」と呼んでいましたが、日本の天皇制はそんな甘いものじやございません。現在の天皇は「憲法を守る」といい、親しまれる皇室をめざし、それは成功していますが、いすれ日本権力層は国民統合の中核としての天皇制を企図しているものと思つています。私たちは、あくまで「日本国憲法」を育て、平和へ寄与したいものです。

のアメリカ合衆国こそ、「ならず者国家」と呼ぶにふさわしい。今世紀初頭のルーズベルト時代の外交方針に回帰せぬかぎり、世界の平和は訪れますまい。日本もまたアメリカ同様、世界に対して重要な役割を担っています。アメリカのイエスマンの役割を果たすのではなく、あくまで日本国憲法を育て、アメリカと対等の立場を取り戻して、世界の平和に寄与したいと望むのは、あながちに不可能ではありませんまい。

見当をつける。

若者たちは久々に会った同国人ということでか、お互いが声高に話し合い見学のためのガイドがいることなどまったく眼中になく展示室に降りていった。

ああ、今日は、お手上げだ、何の役にも立ちそろうないと、遠巻きに若者たちのはずんだ姿を見ていた。

占領地、植民地のコーナーの前に来た。こちらは侵略戦争の加害者で、今日のお客様は大変な被害を受けた人たちの子どもや孫の世代ということになる。私たちはそれを承知してこれからのためになにができるのだろうと自問自答し、こうしてガイドに来ている。それによって緊張する。そして言葉の壁は厚い。

お互いが少しでも歩み寄れるチャンスなのに残念だなと思つていたときである。

突然、背の高い青年が七三一部隊の写真を指して

「日本の若者たちはこういうことを知っているんですか」と、問いかけてきた。

胸にプレートがあるものだか

ら、思わず顔を見上げると

「ああ、中国の大学で日本語を教えているんです。もう少し手にしやべれないといけないので

すが」と笑っておっしゃる。

「じゃあ、日本語でおしゃべりしていいんですね」

やはり通訳を介しての話はもどかしい。

それから教科書裁判の話をした。

「ちょうど八月に結審があつたところで七三一部隊、南京虐殺、従軍慰安婦について執筆者が書いたのを検定で不合格にすることが違法であるということになったのだ。つまりそれまでは書くと不合法になるので加害の事実は伏せたままきている。やつと書けるようになり、これからは教科書にも記載されていくだろう。今まで、日本でも地道に歴史学者が研究を重ねているし、こうした事実を明らかにし本当の信頼関係を築いていこうとしている人が日本にもいる。現にこのミュージアムもそういう歴史認識をひろめていくために建てられたのだ」と。

「周 異夫」という名刺もいた

だいた。私も名刺を渡しておいたので後日、写真といっしょに丁寧な日本語の礼状をくださった。

学生にミュージアムでの出会いを話すと、大きな拍手があつたと書いてあった。

後のグループで入ってきた人ともいろいろ心に残るやりとりがあつた。

今一つ、この夏の戦争展での出

会いを紹介したい。

案内板の前で展示室の概略を親子連れに話していたとき、その後ろから声が上がった。「へえー。日本にもこんなミュージアムがあるのですか?」

というのである。

「まあ、韓国にいるみたい。日本もこんなもの作ってくれているの

広島の平和記念館ほどではないのですが、ここに存在を知り修学旅

行や社会見学に連れてくる先生も増えてきていること、私たちも微力ながら来館の呼びかけをしてい

ることなどを話した。

ボランティアでしていることをいたく感動してくださった。

そして写真と一緒に撮ってくれた。

「周 異夫」と教育勅語や歴代天皇の名前までがつらつらと口をついて出てきた。

「帰つたら、ここのことたくさん的人に話します」。パンフレットより、もう少し詳しいものが欲

しいといわれる所以受付に聞きに行くと、ハングルの説明書をくださつたので、渡したらまた感激され、「まあ、こんなものまであ

るなんて。日本がこんなことをしてくれるなんて」と言われる。

今日の出会いは忘れないし喜ん

で帰つてくださった。今女性学級

で日本語を教えているということ

だつた。

ミュージアムでの出会いは対外的には小さな親善大使の役割を果たしていることになる。

(ふかわようこ)

ですか

私より少し年嵩かとお見受けしたその婦人は、戦後まで日本におられたそうだ。戦後韓国に帰ったことで日本語はペラペラ。

国民学校のコーナーでは「言わされました、言わされました」と教科書裁判の話をしました。

「言わされました、言わされました」と教育勅語や歴代天皇の名前までがつらつらと口をついて出てきた。

「帰つたら、ここのことたくさん的人に話します」。パンフレットより、もう少し詳しいものが欲

しいといわれる所以受付に聞きに行くと、ハングルの説明書をくださつたので、渡したらまた感激され、「まあ、こんなものまであ

るなんて。日本がこんなことをしてくれているなんて」と言われる。

今日の出会いは忘れないし喜ん

で帰つてくださった。今女性学級

で日本語を教えているということ

だつた。

ミュージアムでの出会いは対外的には小さな親善大使の役割を果たしていることになる。

元教員・宇治市在住)

会員の皆さまへ

1. 創刊号から五〇〇号までの合本を求める会員の声があります。一冊三〇〇円で一五〇冊ほどの注文があれば何とか採算がとれそうです。およそ見当をつけたいので、仮に合本申込みの有無、知人・団体・図書館等への購入あっせん見込みの部数、その他のご意見を会費払込振替用紙の通信欄あるいはハガキ等でお知らせ下さい。その結果を参考として合本作製の可否を判断したいと思います。合本に着

手する時はあらためて正式に注文を承ります。

2. 今年は一九六〇年第一次安保闘争から四〇周年にあたります。あの歴史的経験は今後も顧みなければならないと思われます。さしあたり四〇〇字五枚程度で「安保闘争の思い出」の原稿を募集します。

「二〇〇〇年を迎えて」の原稿も引き続き掲載の予定です。で、あわせてご応募をお願いします。



編集後記

二月六日の市長選挙は残念にも井上吉郎候補の敗北となりました。しかも前回四千票の差が二万票に開いています。そこには現在の政治情勢そしてたたかつたがわの取り組み方等、あらためて検討すべき課題が提示されたようです。戦後京都での自治体首長の選挙の経験もさらに語られるべき教訓を宿しているといえましょう。それにしても今回は、特定宗教団体の公然とした政治活動がいちじるしく目につきました。日本国憲法は政教分離をたて前にしています。宗教団体が政治を左右するという事態は、異常な憲法無視というほかありません。いわゆる自公体制の生んだ奇怪な現象です。

この号では「横浜事件」に関する投稿を得ました。犠牲者のひとり和田喜太郎氏が丹後出身とはこれまで気づきませんでした。この思想警察のでっち上げ事件に関しては、現在も「横浜事件・再審裁判を支援する会」が再審を請求して活動しています。旧憲法下のことでつちあげ事件の再審ですらまだ実現していないのがいまの日本です。

ちまたでは西尾幹二「国民の歴

史」の売れゆきが七〇万部に達したと伝えられています。企業のまとめて買いがあり、各所での無料配布があるようです。内容は戦前の皇国史観の再版、建国神話の肯定、「大東亜戦争」の正当化等のひどいものです。しかも各地の教育委員会や教員の一部にかなりの影響をあたえつつあります。

以上のような動向を背景にして、国会ではいよいよ憲法調査会が活動をはじめました。いままでに「憲法があぶない」のです。衆議院の解散もいずれにせよせまりました。沖縄でのサミットも近づいています。いや応なく「政治の季節」になります。その時、民主運動の歴史を語る意義はますます重要性をもつといえましょう。会員の皆さまの積極的なご支持・ご支援を願つてやまない次第です。

会および会報については、左記へご連絡ください。
〔事務局〕

〒六〇五一〇九五三

京都市東山区今熊野
南日吉町三九 奥村和郎
TEL FAX 〇七五一五六一一七四八五